

50

〈 創刊50号記念 〉

平成20年10月5日

明珠



『明珠』五〇号を祝して

龍泉院住職 椎名 宏雄

当山参禅会の会報『明珠』誌が第五〇号を迎えたことを、心からご慶賀申し上げます。それは、ひとえに会員皆様方の篤い道念によって、長年月の間に参禅精進された心の軌跡であり、会の活動記録だからであります。

憶えば、本会報は参禅会が発足した昭和四六年から一四年目の昭和六〇年より、釈尊降誕会の四月八日と達磨忌の一〇月五日を期して、毎年定期的に発行されてきました。その上、会の発足三〇周年と三五周年には各記念行事を満載した臨時増刊号を出していますから、満二四年で五〇号となりました。

さらに、第一二号の附録別冊や、創刊号から第三〇号までを合冊したハードカバー版もあり、不肖の妄語駄弁を個人的に活字化された『口宣』一〇冊や『札拝得髓』『転法輪』の類、小論文類の複製などをも加えると、なんと多くの刊行物をと驚くばかりであります。いうまでもなく、歴代の編集者のご苦心と執筆者の熱意なくして到底なしえぬことを思え

ば、今更ながら深い畏敬と感謝の念に打たれるのみです。

創刊号以来の歩みを緋くと、まず目を引くのはさまざまな特集や記念号が多いことです。初期の頃にバスで著名参禅道場を訪れての「泊参禅の体験記」、「聖僧さま開眼」や「坐禅と私」「病と禅」などのテーマ特集号もありました。やがて、第二〇号からは、会の発足と本誌発行の五年ごとの特集が必ず組まれ、記念号となっています。その他、阪神・淡路大震災や「禅を聞く会」「中国仏蹟参観記」各二回の記念号もあり、多彩な特色を出しています。それは、本会の活動のスケールと内容の多彩さを物語るものであります。

最近、梅花講員との三仏忌共催やウェブサイトの開設発信など、期を画する新しい動きも始まり、まだまだこの会は伸長期にあります。今後もこのすばらしいサンガの担い手を次々と相続することが、良き伝統を築き故人となられた多くの先輩会員に報い、個人ではなしえないボサツ道の大きな歩みとなることを確信いたします。

本号では編者の苦心により、全五〇号までの総目録と筆者別の索引が添えられ、懐かしい方々の健筆が容易に検索し読めるようにな

りました。ありがたいことあります。

五〇号の次は百号ですが、それには一号一号を積み上げることです。すくなくとも六〇号までは、創立四〇周年のイベント記事が、いやもつと驚くべき記事や写真が紙面を飾るのではと、胸の高まりを感じます。会員の皆様、どうかご健康に留意せられて、共に、「学道のボサツ」の歩みを続けましょう。

末尾になりましたが、本号を記念してわが宗教人類学の泰斗であられる佐々木宏幹先生より、特に玉稿を頂戴いたしました。ここに厚く厚く感謝申しあげるしだいです。合掌



〈特別寄稿〉坐禅の力

——龍泉院参禅会会報『明珠』第五〇号発行に寄せて——

駒澤大学名誉教授 佐々木宏幹

私は禅の研究者でもなければ、実践者でもない。参禅経験といえ、学生時代に駒澤大学付設の学寮に住んでいたので、週に何度か大学の坐禅堂で酒井得元老師指導の義務的な暁天坐禅に出ていたのが主なものである。

いまでも宗門の研修会などで参会者と一緒に一炷坐することはあるが、本格的なものではない。

ただし坐禅の「まねごと」なら大学の教員時代に一〇年以上続けたことはある。

大学の文学部一年生のために宗教学を担当していた私は、二時間目の講義に出席した学生たちが落ち着かず、注意してもざわつのがとても気になった。訊ねてみると一時間目が体育であることがわかった。

彼らは九〇分間走ったり飛んだり跳ねたりしたのち、わずか一〇分の間に汗をぬぐい着替えて教場に現れるのである。

これではこちらがいくら厳かに人生とは宗教とは語りかけても、彼らが聞く耳をもち得ないのはむしろ当然である。そこで始めたのが椅子式坐禅（坐禅と呼ぼず「端坐」と呼

んでいた）である。深呼吸をしたのち、背筋を伸ばし顎を引き、両手を法界定印に結んで六〇七分静かにしてもらう。効果観面！彼らは落ち着いたのである。

私のこの話を耳にして、端坐を試みた先生もいた。

こんな程度の禅の門外漢である私が、どうして表題のような文章をものすことになったか。外でもない、日頃敬愛してやまない学僧椎名宏雄先生からのご依頼があったからである。先生は中国禅宗史研究の第一人者であるとともに、ご自坊の龍泉院住職として曹洞禅の普及のために東奔西走しておられる方である。

同じ研究センターのスタッフとしてお付き合いを頂いてから一〇年以上になるが、その間に先生から学びえたことは量りしれない。

この文のタイトルを「禅の力」としたが、この題を目にして「何だこれは！」と怪訝な顔をされる方もおられることだろう。

ことに少しでも坐禅を学びかつ体験した人

は、坐禅とは只管打坐につきるのであり、坐禅をすれば力がつくなどと考える者がいるとすれば、それはまさしく外道の見に外ならないと。

「禅の力」などと言いだすのは、所詮禅の何たるかを知らぬ奴の戯言にすぎないと。

こうした批判に対して私はこう答えたい。ここでいう「力」とは政治力とか経済力とか文章力、ましてや物理的な諸力を意味するものではない。それは、そうした世俗的な力を超えた力にして、宗教的な行に打ち込んだ人物から自然に発散し滲みだす風格であり、気配である。またそれは一般の人びとにたくましく畏敬の感覚を引き起こさせる「聖なるはたらき」であると。

この力はどこまでもその修行者にたいして第三者が感じ覚える性質のものであり、当事者みずからが言い出す性格のものではない。

事例をあげよう。

大学で仏教を学ぶ寺院出身の学生はおおむね真面目に見えるが、なかには遊学の遊を絵に画いたような者もいる。



ところがそのようなぐうたらにみえた青年が、おのれの発心によってか師匠の説得によってかは分らないが、とにかく永平寺のような僧堂に行つて一、二年あるいは二、三年修行して送行してくると、まるで人が變つてしまったかになるから驚きである。

どんよりしていた瞳は澄んでキラキラし、背筋はピンと伸び、合掌する姿にはある種の（聖なる）風格が具わっている。私の最良目のせいかと思つて改めてみても、やはり「坊さんらしさ」が身についている。

この青年僧の姿を目にした檀信徒たちが「お寺の後継者も立派になった。これで安心だ」と述懐する場面を私は何度か見ている。

この点からすると、僧堂とくに本山僧堂に

は人間を変える機構が具わっており、その中核が坐禅であることはまず間違いない。

かく人間を変える力を、ここでは「坐禅の力」と呼んでいる訳である。

ところがこのような青年僧のなかには、自坊に戻つて数年すると、当初の「凛とした僧侶」の姿が失せて「普通のお坊さん」になっていることもある。多分、朝夕の読経はしているが坐禅から遠ざかつていのかもしれない。

こう述べると椎名先生はきつと不快な思いをなさるに違いないことを承知の上のことだが、龍泉院参禅会の会員諸氏は、坐禅会において搭袈裟姿で口宣あるいは提唱される先生に、日常性を超えた迫力または風格を感得しておられるのでなかるうか。

『明珠』に掲載された眼光炯々たる先生の姿（写真）は、その例の一つといえよう。

『明珠』によると、平成一九年から二〇年にかけて毎月の参禅会に集う会員は大体三〇名から三五名。しかも会員諸氏は遠隔の各地から参集されている。今日の参禅会は、会員の同信性と協調性においてあたかも「龍泉院サンガ（僧伽）」のような形態になっている

が、ここまでに至る過程は決して平坦ではなかったようだ。

参禅会が現在のように毎月第四日曜の午前九時からという形で実施され始めたのは、昭和四十六年（一九七二）七月二十五日（日）であつたというから、三十七年前になる。

椎名先生が龍泉院住職を拝命（昭和三年・一九五八）して以来、不定期の坐禅会をもっていたとされるので、同寺の参禅会は実に五〇年の歴史をもつ。

最初の定期的参禅会の参禅者は八名。翌年と翌々年には三名から五名。参禅者一名のときには一対一で坐禅と講義を行い、一度だけ参加者ゼロのときは、先生独りで坐禅をしたという。

以上の内容は『明珠』の創刊号（昭和六〇年・一九八五）に寄せた先生の「龍泉院参禅会の足跡」による。

どんな会や集いにも消長はあるが、何の利益も目的とせず、個人の精神世界の深まりに関わるような会の運営は困難を極める。この困難を乗り越えて今日にいたつたのは、かつて先生を通してはたらいだ「禅の力」によるものと考ええる。

現在の参禅会は椎名先生を軸に、会員諸氏

の力の結集によって運営されている。

それは「朝早くから参禅会を準備する人、『明珠』を編集・発行する人、『口宣』を編集・発行する人、老師の講話を発行する人、年間の諸々の行事を実行する人、典座を引き受けてくれる人、後片付けをしてくれる人等、数え切れない人のお力添えがあつて続けられていることを知りました」（小山斉「年番幹事を終えて」という文章に如実に表れている。

当然のことだが、参禅会会員にはいろいろな人がおられることを知った。坐禅に何かを求めている人、病気が機縁で参禅している人、回を重ねるごとに達成感をもつ人、仏教の思想と教義について博大な知識を有しながら、それを体験的に深めようとしている人等々。いずれにせよ会員諸氏が何らかの意味で「禅の力」に惹かれていた人たちであることはいうまでもあるまい。

本稿で私は坐禅の「力」を殊更に強調してきた。それは聖なる（宗教的な）はたらき（力）であるとも記した。

識者のなかには、「力」にたいして、おぞましく怪しげなものとして嫌悪の対象にしている人も少なくない。ましてや「禅の力」と

はとんでもないと一刀両断する人もいるはずだ。誤解を恐れずに述べよう。

かの道元禪師ご自身が「禅の力」を重視されているのではないか。

「示して云く、学道の最要は坐禅これ第一なり。大宋の人多く得道することみな坐禅のちから（力）なり」（『正法眼蔵随聞記』五―二三）中国の人が数多く悟りを開いたのは、すべて坐禅の力による“というのである。

また道元禪師は、仏前でみずからの罪惡を覆藏なく懺悔する（発露白仏）ならば、その「ちから（力）」により「罪根を銷殞せしむるなり」（『正法眼蔵』谿声山色）とも述べておられる。

ここで道元禪師の「力」についての考え方を詳しく論ずるつもりはないし、また私にはその力量もない。ただ禪師が「坐禅の力」を仏道修行の要とされていたことを指摘できれば、十分である。どうして十分なのか。

ここで視点を修行者や僧侶から檀信徒や一般の人々の側に移してみよう。

檀信徒や一般の人々が現に僧侶に求めるものは何であろうか。統計や調査結果から見る限り、どの宗派かを問わず九〇%以上が故人の葬儀と先祖供養である。

どうして人々は葬儀と先祖供養を僧侶に依頼するのか。歴史的な経緯をはしょって肝心のところをいえば「お坊さんの力によって死者を浮かばせるため」ということになる。僧侶は死者を仏国土に送り、安泰ならしめる聖なる力を具えているとの共通認識（感覚）を、強弱の差はあれ日本人の多くが抱懷しているからこそ、現代の仏教は現実に存在しうるのである。

それでは「お坊さんの力」とは何か。繰り返しになるが、曹洞宗についていえば、それは「坐禅の力」以外の何ものでもあるまい。

椎名先生はこう述べておられる。「僧侶たちが厳しい修行によって身につけた禅定力は庶民が葬祭や授戒を競って求める原動力となっていたのですが、この禅定力というものが、従来あまり注目されていなかった点であると思います」（椎名宏雄「宗旨と寺院現場のあいだ」、『これからの仏教について考える』曹洞宗東京宗務所）。

龍泉院参禅会の今後のますますの発展を心より祈念いたす次第である。

（宗教人類学者）

従容録に学ぶ

(四三)

第一則 世尊陞座

〔示衆〕

衆に示して云く、門を閉じて打睡け、上上た機に接す。顧鑑し頻申曲げ、中下の為にす。那ぞ曲親木に上つて、鬼眼睛を弄するを堪ん。箇傍、肯わざる底あらば出で来れ、也お伊を怪むることを得じ。

〔本則〕

挙す。世尊、一日陞座る（今日は不著便ぞ）。文殊、白槌げて云く、諦観よ法王法を、法王法こそ是くの如し（他は是れ何の心行とか知る）。世尊、便ち座を下る（別日に再び商量せん）。

〔頌〕

頌に云く、一段の真風を見るや。綿綿く化

母は、機梭を理う。古錦を織り成して春象を含む。東君の漏泄をば、奈何んともすることなし。

今回はめでたい五〇号ですから、第五〇則ならばよかったです。ウカツにも第五〇則「雪峰甚麼」はすでに第四五号に採用済み？と知り、ハタと困りました。でも、お祝いにふさわしい則がありました。第一則「世尊陞座」です。

この則は釈尊が主人公という圧巻！ お経は釈尊の説いた教えですから、釈尊ご自身やお経がメインテーマとなっている則は、『従容録』では合計六則を数えます。中でもこの第一則の「本則」中にある文殊さんの言葉、「諦観法王法、法王法如是」という五言二句は、今もなおお禅寺で新住職が入山する際の儀式や、結制という一世一代の修行儀式の際には、住持が釈尊に代って行った説法を証明する言葉として、さいごに老宿が莊重に唱える

ならわしです。ですから、この一則はめでたい則といえます。

この第一則は、じつは『碧巖録』では第九二則にランクされていて、古来有名な公案であることを示しています。ところが、いつものように「示衆」と「本則」だけでは、かなり短い。そこでこの則では、「頌」もとりあげておきました。いうまでもなく、「頌」は宏智さんが「本則」に対して七言四句の「ほめことば」をつけたものであります。

さて、全体の文意については、毎回思いきった意識的なルビをつけて訓読していますから、本文を一読すればおおよその意味はおわかりことと思います。でも、いっそう平易にしてみましよう。まず、「示衆」ですね。



「先生が学生を悟りに導くには、相手によって口を開かなかったり、さまざまな言動をとったりするんだ。けっして高座から大上段の説法とは限るまい。そう思わん人はいるかな。まあ、いてもかまわんがな。」

こんなところ。いうまでもなく、「本則」の風光をたたえているのですね。「曲親木」とは説教用の高椅子のこと。つぎに「本則」。「釈尊が高座に上ったままなのを、文殊さんが『これこそ真実の仏法だ』と証明した。すると釈尊は高座から降りた。」

ただこれだけです。「陞座」とは高座に上って説法すること。「文殊」はマンジュシリーで、釈尊の脇侍とされる仏さま。むかし、日本が中国東北部に満州というカイライ王国を勝手につくりましたが、この国名は文殊の梵名「マンチュリア」によったとされますね。「白槌」とは禅寺で修行儀式などの際に、槌という法具を打って合図すること。「法王法」の法王は釈尊、法はその教えですから、釈尊の教えを意味します。

また、万松さんのコメント「不著便」とは、ここでは「だれにもわかるまい」の意味です。つまり、この「本則」は、釈尊がただ高座に上っただけで何の説法もしないで降りたのを、

文殊はほめたたえていますし、万松さんも肯定しているわけです。でも、私たちには今ひとつピンときませんね。

そこでもう一つ、宏智さんが詠じた〔頌〕（ほめうた）をみましょう。

「釈尊説法の真風を見てとったかな。自然のつくり出す妙理のしらは、すばらしい四季や変化を織りなすばかり。文珠がちゃんと証明されたとおりじゃ。」

このように、宏智さんは釈尊が示された大説法の妙味を、あたかも大自然をつくりだし変化させる大いなるいのちのはたらきになぞらえているのですね。「化母」とは万物を造化する主人公。「東君の漏泄」は春神さまか



雲に蔽われた廬山

らのこぼれかもしれませんが、ここでは文殊による絶妙な証明を意味しています。

釈尊は世界や人生の奥底をなす真理をお悟りになり、生涯それを人々に教え示されました。この真理の法のことを、禪門ではもっと具体的に正法や仏心や仏法など、さまざまに呼びますが、私はさいごの「仏法」を好んで用います。禪門では、この仏法を師から弟子へと代々受け伝えて今日に至っているのだ、というふう。それは「真理の法」ですから、人間社会のきまりとしての法律やルールなどとはスケールがちがい、世界すべて人生すべてを包みこむ広大な法であります。

だいたい、「法」のもとの意味は「サンズイ」に「去る」ですから、「水が流れゆくありさま」を意味します。水は高きから低きへ、太陽は東から出て西へ、春夏秋冬の移ろいのように、それは人間的なモノサシや価値判断を超えた大いなる自然の風光であります。そして、それは錦を織りなすようにすばらしい世界中の事象を形づくり、動植物のいのちを育んでくれるばかりでなく、私たち人間どものために、常に不断の説法という恩恵を与えてくださっているではありませんか。

私は以前、高血圧症で三日入院した際に、

病窓から見える変てつもない冬の樹木が、何と神々しい語らいをしてくれたかを忘れることができません。次元こそ違いますが、宋代の蘇東坡が廬山で溪流の響きを聞いて悟った感激を、「溪流は即是ぬ広長舌、山色は清淨心に非ざることなし」云々の心境こそ、嘿の中に最高の説法をされた釈尊の心を、わが心としたものでありましょう。こうした釈尊の示された大法王法が第一則に置かれているところに、この『從容録』の意義を思います。

『明珠』五〇号発行に想うこと

柏市 高野千代子

いつの間にか、時の流れを重ね会報も五〇回発行となり、編集の五十嵐様より、何か一筆想うことを寄せていただきたいとのご依頼により、筆をとらせていただきました。

第一号は、故高間様からのご指名により、小畑様と二人でまとめさせていただいたと思います。刊行日は昭和六〇年四月八日でございます。当時の沼南雑記に記されておりますように、故高間先達より「一年を平たく並べるのではなく、薄紙のような一年でも平たく

重ねて」との重い言葉が記されています。

それから二五年、参禅会の『明珠』は椎名老師のご指導のもと、会員皆様様方の坐禅に寄せる想いを積み重ね、「尽十方世界一顆明珠」としてキラリと光り続け、今日にいたっております。有難いことでございます。

不肖、私もこの二五年をふり返りますとき、決して平らな道ばかりではございませんでした。日々の勤めに追われ、働き続けてきた私は、卒業と共に、お寺にご縁をいただきました。その中、一人息子を親代わりに育て上げてくれた両親を冥界に送り、お陰様で結婚いたしました息子も二人の子供達にも恵まれ、幸せをいただいておりますとき、最愛の家人が五一歳の若さで、ガンにおかされ亡くなっていました。残された息子と二人の子供達の不憫な姿をみるにつけ、涙する毎日でした。

その痛みがやっと少し癒えてきたとき、今度は私自身が、買い物からの帰り、自転車共々転倒いたし、右大腿骨折により手術いたし、四三日間の入院生活という事故に遭いました。現在もリハビリに通っております。八〇歳という歳を忘れ、体の一部になっておりました自転車で走り回る私に、神仏のいましめをいただきました。

病院には、ご老師が枝についた柿を持ってお見舞いに来てくださいましたが、そのときの柿の赤い色が、今でも瞼に浮かびます。この年月の中、ご老師を始め、ご縁をいただいた多くの優しい方々に、どれ程励まされ、助けていただいたことでしょうか。有難いことでした。

お寺での坐禅やご老師のご提唱が、いつの間にか私にとって仏行の証しとなり、悲しみ苦しみを乗り越えて、今があるように思われます。これからも、そのまんま、そのまんまを善しとする人生を歩かせていただきます。



初代『明珠』編集委員長高野さんを囲んで

「明珠の教えに学ぶ」

我孫子市 清水 秀男

『明珠』が椎名老師のご指導のもと、昭和六〇年から数えて五〇号を刊行される運びとお聞きし、小畑節朗代表幹事以下、歴代の優秀な編集者の絶大なる布施の賜物だと、深く感謝申しあげます。更に今年は、龍泉院のホームページが五十嵐様を中心とした皆様のご尽力により立ち上げられ、龍泉院の禅風が、全国に弘布され、法を求める多くの方とのつながりが出来る様になったことは、ご同慶の至りに存じます。特に、毎月の参禅会の最初に椎名老師が説かれる口宣が、肉声で拝聴出来ることは、療養中の身にとっては有難く、襟を正し、身を引き締めて教えに参じている次第です。

五〇号を発行される機会に、創刊号の巻頭に椎名老師が、会誌を『明珠』と名づけたゆえんと、その意味するところを書いておられるので、それを紹介しながら、「明珠」の教えについて学んでみたいと思います。

巻頭言では、青原（せいげん）下の雪峰義存（せつぽうぎそん）の法を嗣がれた唐代の禅匠、玄沙師備（げんしゃしび）の悟りの境

地を表わした言葉「尽十方世界一顆明珠」について、道元禪師が究尽された『正法眼蔵』「一顆明珠」の一卷を取上げられ、簡にして要を得た説明をされています。

まず、「明珠」については、「真如・仏性・法性・本来面目、などのたとえである。すなわち、真如・仏性・法性・本来面目などは、この世界における真実のすがたであり、常に円満で無欠無余、表も裏もなく、不二平等、内外玲瓏、キラリと光っている当体そのものである。したがって、これを明珠にたとえる」と述べられている。

続いて「尽十方世界一顆明珠」について、「尽十方世界が仏性一元の世界であり、自己本来の真実のすがたである・・・尽十方世界すなわち、あらゆる世界は絶対真実のすがたであり、われわれにとっては、この与えられた現実を、徹底して強く正しく生きぬくことが、仏法の修行である。そして、坐禅こそは、この尽十方世界の行そのものであり、十方世界を坐断した無心のすがたにはかならない」と、「明珠」と名づけるゆえんを述べられ、最後に「願わくは。その名を汚すことなく、自己本来の真実相に直参直入して、宝珠をしていますます明光あらしめんことを」と結んで

おられる。

椎名老師は尽十方世界（あらゆる世界）とは、自己本来の絶対真実の姿と言われるが、真実の姿とは如何なるものであろうか。私はこれを「固定した分別のモノサシ」を捨てた姿だと感得しています。各人はそれぞれ、自分流のモノサシを持ち、それを正として価値判断をし、行動している。そしてそれに固執し、悩み、苦しみ、自分を傷つけ、又、他人と争い、それが満たされなかったら、遂には相手に精神的・肉体的にも傷つけたりする凶器にもなっている。

そのモノサシもよくよく考えてみると、例えば権力、地位、名誉、学歴、お金、皆が憧れるものを手に入れることだったりする。結局それは自分のモノサシというよりは、世間における他人の相対的価値のモノサシに過ぎず、それに振り回されているとも言えます。そして最後には世間が悪いのだいうことにもなる。まさに釈迦が説いた「他に依止する者は動揺す」の典型になっているのが、現実ではないでしょうか。

「尽十方世界一顆明珠」の世界は、その様な煩惱・思い・分別を手放しにした、絶対真実の世界。澤木興道老師の最後の高弟、内山

興正老師の言葉を拝借すれば、「幸も不幸も、悟りも迷いも、生も死もまったく一目にみて、どっちへどうころんでも自己ぎりの自己を生きたるであり、ただこれだけ」の世界ということになるのだと思います。

自己ぎりの自己を生きたるとは、例えば不幸が巡って来たら、不幸こそ今の私の生命なのであり、真つ直ぐに不幸を生き抜き、つとめあげることであり、もし幸が巡って来たら、幸こそ私の生命であり、真つ直ぐに幸を生きぬき、つとめあげるといふ態度だと、内山老師は言われる。これは、創刊号で、椎名老師が言われた「この与えられた現実を、徹底して強く正しく生きぬくことが、仏法の修行である」に呼応すると思います。

内山老師のことでは印象深い思い出があります。約三〇年前、私が関西に住んでいた時、定期的に京都の「宗仙寺」で開かれていた内山老師の「正法眼蔵味読会」に参加し、拝聴していました。提唱中、ハンケチを握りしめた手を開き、ハンケチを壇上に落とす動作を何度もされたことを思い出します。

それは、人間は、煩惱や思いやモノサシ“（頭）の分泌物と表現された）を、後生大事に固く握りしめて持っている。それを手放すこ

とが肝要であることを、示唆されたのでした。そしてその手放しを百千万億発する人生態度が、自己の生命の実物に生きることであると言われた。

さらに、立派なバラの花を澤木老師に、小さなスマイレの花を自分に例えられ、「バラにはバラの花が咲き、スマイレはスマイレの花が咲く」と表現されました。「自分は立派な澤木老師と雲泥の差があり、とても澤木老師にかなわないが、夫々に自己の生命の実物に生き、一〇〇％燃焼させれば良いと悟った。その自己の生命を如何に充実して発現させていくか、それが修行である」と繰り返し、繰り返し説かれたのです。まさにこれが、尽十方世界一類明珠の世界ではないだろうか、反芻・吟味しています。

今、私は病の縁を得ている。しかしそれが今の私の生命なのであり、愚図らずに、真つ直ぐに病を生きぬき、つとめあげねばならないと猛省しています。会誌『明珠』が創刊五〇号を迎える機会に、もう一度「明珠」と命名された原点に還り、その「明珠」の真面目を行じていかねばと覚悟を新たにしているところです。

最後に、会誌『明珠』の更なる充実と継続

を心から希いますと共に、道元禪師の師匠である如浄禪師が、“東西南北いずれから風が吹こうが、構えることなく、強く吹けば強く、弱く吹けば弱く、チリンチリンと涼音を奏でる風鈴のさま”を表わされた「風鈴の偈」を、「明珠」の究極の姿として味わいながら、筆を擱くことにします。

「渾身口に似て虚空に掛かる 東西南北の風を問はず 一等に他が為に般若を談ず 滴丁東了滴丁東」

（注：滴丁東了滴丁東（ティチントンリヤン ティチントン）は、風鈴の擬声語）

会員の心で綴った『明珠』の数々



一夜接心

六月七・八日

今年も恒例となっている一夜接心が、六月七・八日の両日、天徳山龍泉院で行われました。二三回目となる今回の一夜接心には、二四名の方が参加されました。例年と同じく七炷の参禅と椎名老師からのご提唱、および朝



課と作務などの行事が行われました。

昨年の一夜接心からは『永平初祖学道用心集』を、数年にわたってご提唱いただくことになっております。

昨年に引き続き『永平初祖学道用心集』の第五章「参禅学道は正師を求むべき事」と第六章「参禅に知るべき事」についてのご提唱をいただきました。特に胆に銘じたのは、「参禅に知るべき事」の中に述べられている「ただ宗師に参問する時、師の説を聞いて己見（こけん）に同ずること勿れ」という文面です。道元禅師は己見に囚われる事を厳しく戒められていらっしゃいます。己見に囚われていては見るべきものも見えず、聞くべきものも聞けず、せっかく正師に参しても、無駄に時間を過ごす事となります。己見に同じないためには、只管打坐あるのみだと思いました。

夜坐の二炷終了後、五十嵐・斉藤さんから、五月初めに公開された龍泉院参禅会のウェブサイトにについて、説明が行われましたが、翌日は起床が早いことから、説明後、早々に床に付かれる方もいらつしました。

二日目は四時起床。すぐに暁天の坐禅が始まりました。夜明けとともに外が白みかけ、鳥のさえずりが聞こえてくる中、清々しい気

持ちでした。しっかり坐ることが出来るのも、一夜接心ならではの醍醐味だと思います。

朝食後二炷の坐禅と禅講があり、松井典座・加藤さんの心づくしの御斎をいただいた後、茶話会に移り今年の一夜接心も無事円成いたしました。

初めての「一夜接心」

柏市 登森 秀志

「登森さん、初めての参加で大変でしたね」という椎名ご老師の労いのお言葉を戴き、山門へ向いましたが、境内の花々や木々の緑が鮮やかに、この上なく風が爽やかに感じられました。

五月上旬に「一夜接心」のご案内をいただき、「一夜接心」とはどういうものか、それがどのような形でどのような流れのものであるのかも全く知らず、ただ参禅会の行事には出来る限り参加してみようという、入会に当たっての自分なりの心構えからだけで、参加の申出をしました。

そもそも参禅会に参加させていただいたのが三月の例会からで、二回の参禅経験の身ですから、未だ坐禅の入口にも立っていないという状況でした。単なる好奇心ともいえる状

態での「一夜接心」への参加が、無謀だったと後悔したのは、初日受けを済ませ「一夜接心差定」に目を通したときでした。

泊りがけの坐禅ですから、夜と早朝の静寂の中で坐禅をすること、そしてご老師より法話を拝聴すること位に考えていたのですが、二日間を通じて、七回もの坐禅が行われることを知ったとき、果たして自分は最後までつのかなという、不安が先ず頭を過ぎりました。しかし、ここに至ってはどうしようもありません、大きな緊張感を抱いての、私の一夜接心が始まりました。

先ず何事に付け用語（言葉）に馴染みがなく、行ずるに作法を承知していませんので、向いの方を見、左右の方を覗つての真似に、一生懸命にならねばなりませんから、食事も行茶も、その場では味わうところまでいきません。朝食の際、ご老師がお粥の戴き方などお話し下さいましたが、私の無作法がお目にとまっただけのご教示と恐縮し、また有り難く存じた次第です。ただ一つ味が分り、美味しいと感じたのは、一夜接心円成後に、昼食のデザートとして、西瓜を戴いた時でした。

初日途中からの参加でしたので、六回の坐禅となりましたが、坐禅の無念無想というも

のが具体的にどのような状況か分らず、このことが一種の脅迫観念となって、坐禅を全うすることができなかろうか心配でした。そこで「坐ること」だけは全うしようと考え、それが苦痛になったら、苦痛を紛らわすために、逆に、何か特定のことを一生懸命考えよう」と心密かに考えました。そして考えるテーマとして、自分が在職中の大きな出来事を数件決めていました。

しかし、振りかえってみると、どのテーマもきちつと筋立て考え続けることは、できなかったように思います。考え始めて暫くすると、思考の情景がすつと霧に吸いこまれるように消えて、ふと気がつくと、目の前の柱に入った縦のひび割れが、頭の中のスクリーンに映っている映像の全てであるようでした。幾度かこうした繰り返しがありましたが、次第に坐っている時には、何かを考え続けることも難しいように感じ始めました。と同時に、その後の坐禅に入るときの気持ちも、軽くなったように思います。そしてやがて「普勧坐禅儀」（後半）の読誦となりました。

今振りかえってみますと、私として「一夜接心」の行の本来の意義を、会得できたかということは心もとない限りですが、兎も角も、

差定の内容を最後まで為し得たのは、先輩会員の皆様のお陰であり、改めて「人人皆道を得ることは諸縁による」の一節を噛み締めている次第です。

有難うございました。

（合掌）

身体が無くなる坐

流山市 中 宏誠

どうすれば静かに坐れるか、試行錯誤をしてきました。時々、「身体が無くなる坐」に出会います。心掛けていることは

一、身を正す

背骨をキチツと伸す、お臍の前に突き出す、腰を引く、頭の天辺が天井から引っ張られている感じ、顎を引く

二、奥歯をキチツと噛む、舌を上顎に付ける、離さない！

三、目は両眼で鼻の頭を見る、それに集中する！すると視線が自然に一メートル先に落ちる

一メートル先を見ると視界が広がり、気が散り易いので、徹底して鼻の頭を見る

四、息をユックリながく吐く、吐いた息をズーと追いかける！すると吸う息は意識することなく、自然にお腹の底にストンと入る、一瞬息が止まる腹式呼吸になる

五、前記の四の呼吸のリズムを続けていると、アレコレ浮かばなくなり、妄想が消える。

六、組んだ足の感覚が無くなってくる「組んだ足が無くなる」「身体が無くなる」
七、頭が（頭から上）宙にポカンと浮いている、吐く息だけがある！

気をつけることは、身を正すこと、奥歯が浮かないこと、舌が上顎から離れないこと、両眼で鼻の頭を見ることに集中していること、以上です。

合掌

首座法戦式に随喜して

松戸市 小畑 節朗

その日平成二〇年四月二十九日、安房鴨川は快晴、房総の海はキラキラ光っている。曾呂街道に入り、新緑が萌える棚田の奥に、陽光に包まれた古刹安松山宝昌院がある。この日

を卜して、曹洞宗千葉県宗務所長で、宝昌院方丈の黒岩一哲老師には、「普山結制（しんざんけつせい）」の盛儀を挙行され、その会下で伊藤幸道和尚が首座（しゅそ）となり、「首座法戦式（しゅそほっせんしき）」を挙ることとなった。

参禅会員の一人として祝意を表すべく、椎名堂頭老師にお供して随喜させて頂いた。お聞きする所によると、「結制」とは、禅宗の修行僧が夏の修行期間、外部との連絡を一切絶って修行することで、これはお釈迦様が定めた制度であり、多くの僧が結集することから「結制」といわれている。

制中において、修行僧のリーダーである「首座」が、住職にかわって佛法について問答を交わす儀式を「首座法戦式」と言い、住職資格を得る条件のひとつとなっている。具体的には、法堂に住持堂頭大和尚が入堂し、大和尚に成り代わり、手渡された大和尚を象徴する「竹篋（しつぺい）」を手に、投げかけられる数々の問いに即座に答えるという、問答形式で式は進行する。

今回の問答は、『明珠』で毎号連載お馴染みの『従容録』百則中の第二則「達磨廓然（だるまかくねん）」により行われた。列席の大

衆方より、鋭い数々の問いを浴びせ掛けられる。問髪をいれず首座は「竹篋」をドンと突き、本堂が割れんばかりの元氣瀉刺たる大声で応える。正に首座の面目躍如たるものである。

問答が終わって、後堂老師西堂老師に続き、本師椎名老師と住持黒岩老師の祝語で式は円成した。

儀式化されているにしても、法戦式は自ら



『従容録』を頂く幸道和尚

の境地を示し、自らも確認する儀式である。まことに永平寺四年間の修行総括とも言うべく、真に道力が溢れ迫力に満ちたものであった。

思えば、平成一四年一二月の成道会で、参禅会員の一人である伊藤幸一さんが出家得度してから五年の歳月が流れ、此の度、幸道和尚として立派な和尚が誕生した。

椎名老師は幸道和尚得度の時、『明珠』三八号に「我を成す者は朋友」の題で百丈禪師の故事を引かれた一文を寄せられ、最後に「幸道君の得度式に共に随喜し、共に持戒を誓い合った大勢の友たちの心を忘れることはないであろう。こんなすばらしき道の朋友たちと共に、法身堅固、弁道増進をただひとえに祈念してやまない」と結んでおられる。

「初発心の時、便わち正覚を成す」の金言の如く、幸道和尚には初めて参禅会に来られた時の、揺るぎ無い発心が脈々と続き、沸々と湧き出でている決意を見るにつけ、今我々参禅会員は幸道和尚を勝友として、また我々自身を感化する勝縁となして、行かねばならないと、肝に銘じた次第である。

堂頭老師がいみじくも『明珠』誌上でお説きになった、遙か唐時代の道吾と雲巖の両禪

師と、百丈禪師との佳話を、いま深く味わっているところであります。 合掌

心の時代を生き抜く僧侶を目指して

鎌ヶ谷市 伊藤 幸道

私の「発心」は紛れもなく平成一三年二月龍泉院参禅会様の門を叩いた時だと思っています。私は幼い頃より、何を思うでもなく「人を幸せにしたい」という気持ちで常に持っていました。しかし、ただ漠然としていた思いが、平成一一年三月、仕事の帰宅途中に自動車に撥ねられ重傷を負った時、その入口の門が開かれた様な気がします。

私は月に一度の坐禅がとても大切に、中途半端な気持ちで坐りたくなく、常に必死で坐っていた記憶があります。当時私の頭の中には、永平寺の存在は全くありませんでした。それが平成一四年夏、突如として永平寺に行くには今しかない、今でないダメなんだと、自分の中のもう一人の自分が騒ぎ出したのです。その年の一二月、椎名御老師の元で出家得度をさせて頂き、平成一五年三月、大本山永平寺に上山させて頂きました。

永平寺では満四年修行させて頂き、目標の「堂行寮」を終える事が出来ました。今思っても永平寺は厳しい修行道場でした。朝起きてから夜寝るまで、とにかく「分」刻みのスケジュール、その中で進退を覚え、公務を覚え、お経を覚え、寝る時間は三時間が当たり前、毎日毎日同じ事の繰返し、一日一日の生活は実践の繰返しです。一見すると単調でつまらない気がしますが、余計な事を考える事なく、一瞬一瞬を無心で生きる、一日一日の生活をしっかり生き抜く、それが道元禪師様の教えであり、今も変わる事のない永平寺の修行なのです。

私は平成一九年五月に、永平寺を送行させて頂きました。送行後は千葉市東禅寺伊藤博



竹籠を返還する幸道和尚

陽御老師の元で、日々勉強をさせて頂いておられます。そして、今年四月には、千葉県鴨川市にある宝昌院黒岩一哲御老師の晋山結制において、首座を務めさせて頂き、法戦式を行なわせて頂く事が出来ました。

七月一五日には無事解制を迎え、やっと僧侶になったという気持ちです。私の心願は鎌ヶ谷に新寺を建立する事です。今の人々、特に若い世代の人々には、仏教やお寺の存在が薄くなつて来ていると思います。今後、葬儀・法事・戒名も必要としない時が来ると思いますが、葬式仏教としてのお寺、そして僧侶が必要とされない時が来るのです。しかし反面、今は「心の時代」と言われています。私が思うに、心の時代こそが道元禪師様の教えが生きる時代だと思います。

私はこれから道元禪師様と共に、心の時代を生きて行きたいと思っています。

切に思うことは必ずとぐるなり

龍泉院住職 椎名 宏雄

「此間の祝語せんに、高祖大師曰く、切しかんに思うことは必ずとぐるなり」と。首座和尚、

かねてより新寺建立の念願、必ずとげられよ。これを云うや、万福多幸!!」

幸道和尚最初の出世儀式である首座法戦式しきぞうほうせんしきの場で、不肖が唱えた祝語である、道元禪師の語は『正法眼蔵随聞記』の一節。よきことを切に願う思いは、それを常に抱き続けられれば、いつかは方策が講じ必ずなしとげられるというお示しである。

幸道和尚は永平寺安居中あんじちゅうも、山を降りた送行後あんごも、「将来は新寺を建立したい」と述べていた。いうまでもなく、すばらしい願いであり、不肖は双手を挙げて賛意を表した。

なるほど、和尚の住する鎌ヶ谷市は交通の四通発達した人口急増地域ながら、寺院は僅少であり、特に曹洞宗は皆無! 隣りの白井・印西という北総線沿線の発展地域も同様であり、合計四〇万近い人口を擁するこれら三市は、なんと曹洞宗の完全な空白地帯なのだ。だからこそ、いくら小さくとも、坐禅や法話のできる布教所一棟が設置されれば、それはこの地帯における曹洞禪のパイオニアとなり、画期的な宗教活動の嚆矢となるではないか。そこを根城にして全力投球する。これに過ぎる出家者の本懐はあるまい、と。そこで、大勢の僧侶が注目する法戦式という晴れの舞台



椎名老師と幸道和尚

で、あえて不肖が高祖大師のお言葉を引いて祝語として述べたのである。

しかしながら、何事も云うは易く行い難し。むろん前途には幾多の困難が待ちうけるのは必定。だが、こんなやり甲斐のある仕事があったとあろうか。奈良の丸子孝法老師は一六六年間の托鉢のみで、古利ながら無一物に帰して

いた平等寺本堂を立派に再建したではないか。幸道和尚には永平寺四年間の安居歴に加え、寺院生活に縛られぬ自由さと若さという財産がある。法身堅固にて精進による大成を切に願う。

至禱々々

第八一回大道会弁道法撰心会に参加して

柏市 鈴木 民雄

坐禅体験できる所を小畑代表幹事に相談しましたところ、**薦福山寶慶寺**（ほうききょうじ）をご紹介され、平成二〇年四月三〇日から五月五日迄、大道会撰心に永野さんと一緒に参加してきました。

寶慶寺は福井県大野市にあり、越前大野駅より一二kmの銀盃峰（ぎなんぼう）の麓にあります。奥越前の長い冬が終わり、白、ピンクの芝桜が咲き乱れる畑は、田植えの真最中でした。小畑代表幹事からは、そこは豪雪地帯なので、間違っても冬に訪ねる所ではないぞと、ご注意を受けた所です。

御開山寂円禪師は、中国宋朝の人で、天童景德禪寺で道元禪師とご一緒に、如浄禪師の

もとで参学を続けられ、帰朝した道元禪師を慕って来朝されました。道元禪師ご遷化の後、この銀杏峰の麓に入り、石上に坐禅すること一八年といわれています。

また、大道会は「仏祖の大道、かならず無上の行持あり・・・」（『正法眼蔵』「行持の巻」）より命名されたもので、故橋本恵光老師が提唱され、駒沢大学有志により創設されたものです。毎年この時期に、有縁の一般参禅の方々と共に、五泊六日の撰心を行じている会で、今回が八一回目を数え、永野さんは八回目の参禅です。

四月三〇日午後二時に上山して、首座児玉正見雲水より撰心会の心得、注意事項の説明を受け、三拝の仕方、応量器の使い方を教えていただきました。その後、法堂と開山堂に案内され三拝いたしました。

今回初めて参禅する浅野保治、樋口夏彦、私の三名は、堂長であられる**田中真海老師**の部屋に案内され、相見いたしました。田中老師より、窓から望む標高約千五百米の銀盃峰が、達磨大師の面壁坐禅された少林寺の少室峰の山容と、極似しているとの説明を受けました。

撰心会は四時（しいじ）の坐禅、「黄昏（こ

うこん）・後夜（ごや）・禺中（ぐうちゅう）・晡時（ほじ）」と、三時の諷經（ふぎん）「朝課（祇園正儀）・日中（発菩提心、義雲禪師發願文）・晚課（自受用三昧）」と、九時、三時からの日天作務との祇管打坐の毎日でした。今回の参禅者は、僧堂外堂四板に延べ二三名が坐禅し、その中には太白血蓮師一行六名の外国人も、同じ修行を勤めました。その内四名は在家、一名の方の出家得度式が太白血蓮師により厳修され、五月四日の在家得度式にも参列いたしました。

洗足（入堂の前に足を洗う）、外單での坐禅上牀（単に上る法）、僧堂行鉢、全てが初めての体験で無我夢中の修行でありました。今回の撰心会で一番苦しかった事は、一九〇〇の木板二打から始まる、黄昏坐禅であります。坐禅は、身体を調え、息を調え、自然に心が調ってきて、どこにいても、何時でも心が安らいでいられる姿といわれています。しかし私の坐禅は、身体中に力が入り、緊張と足の痛さで、左肩が凝り痛み、心が安らいでいる境地には、届かない状態であります。

終了時間を示す二〇…五〇の小開静まで、一度組んだ結跏趺坐を崩さず、続けることがいかに困難か、身心脱落の境界には程遠いあり

さまでした。しかし法界定印の法（心は左の掌の上に置く）の意識を強く持ち、できるかぎり身体の力を抜き、特に両手、両腕の力を抜くことを心掛け、そして禪定に深く入るために大切な欠気一息（かんきいつそく）、左右揺振の時間を多くとる為、早めに入堂する事に心掛けました。

最終日に、独参・入室の作法を教えていただき、老師の部屋からの鈴の合図を確認して、喚鐘を二つ叩いてから入室しました。撰心会に参加させて頂いたお礼を述べるだけで、色々教えたいただきたいことがあるのに、口から言葉がなかなか出てこなく、ついに退出してしまいました。残念無念。

「典座内、各寮、その他誰もいない所で、つい気を許して閑語・放免に流れ易いので、各自自覚を失わないよう、自己を見詰め、注意すること」。これは撰心会での心得・注意事項の一部です。

都会の騒音の中で生活していると、知らず知らずの内に、自分の声が大きくなっていきます。テレビもラジオも無く、携帯電話も繋がらない、人里はなれた山門の中での撰心で、人間の声が何と遠くに届くことかと、思い知らされました。

自分自身反省し、参加者全員で、静寂な環境を作り出し、その中で六日間坐禅できたこと、自分自身洗心されたと感じました。撰心中は、出される食事以外一切口にしていなかったため、永野さんと福井駅で別れた後、真直ぐ売店に向かい、買い求めた缶ビールの美味しさは、忘れられません。その美味しさを求めて、不謹慎ですが、寶慶寺を又尋ねてみます。

合掌

龍泉院ウェブサイト公開される

柏市 五十嵐嗣郎

今年の五月の大型連休に、龍泉院のウェブサイト (<http://www.ryusenin.org/>) がオープンいたしました。昨年夏に清水さんから、龍泉院参禅会としてのウェブサイト立ち上げたいとのご要望があり、椎名老師にご相談した所、ご快諾をいただきました。早速、明珠編集関係者が集まり、ウェブサイトで発信するコンテンツの構成や、そのために必要なIT施設の検討に入りました。

何回か検討会を重ね、椎名老師ともご協議をし、外部の方からも色々アドバイスを求めています。そのような折、岡田印刷で『明

珠』の打ち合わせのついでに、ウェブ製作会社について問い合わせた所、関連会社のバーテックスさんを紹介されました（実は、岡田印刷の社長のご子息が、この会社の社員でした）。

直ぐにバーテックスの社長さんが対応してくださり、簡単な打ち合わせをした所、こちらの要望にピッタリの制作方法をご提案してくださいました。更に、『明珠』の印刷をお願いしている岡田印刷の関連会社であれば、『明珠』をウェブサイトへUPする作業も、スムーズに行くことから、その場で発注することに決めました。

バーテックスさんと何度も打ち合わせを行い、更に今年の三月末には、龍泉院様にウェブサイトのコンテンツ作成に必要なIT関連の工事や機器類を設置いたしました。

バーテックスさんでのウェブサイトの制作が終わり、中味に当たるコンテンツ（参禅会の月例報告や、中寫さんがモデルになった参禅方法など）を我々で揃えて、ようやく今年の五月に公開にこぎつけました。

ウェブサイトの制作の当たられた株式会社バーテックス代表取締役の竹澤雅彦様からは、今回の作業を終えて、左記のような感想文

をいただきましたので、ご覧下さい。

なお、龍泉院のウェブサイトを呼び出すには、グーグルなどの検索エンジンをご利用いただくと便利です。検索のキーワードとして、「龍泉院」と「参禅会」を掛け合わせて検索しますと、上位2〜3番目にリストアップされます。

また、龍泉院のウェブサイトは、左記のサイトのリンク集にも掲載されていますので、こちらから入られても結構です。

曹洞宗公式サイトである曹洞禪ネット

(<http://www.sotozen-net.or.jp/>)

全国曹洞宗青年会

(<http://www.sousei.gr.jp/>)

千葉県曹洞宗青年会

(<http://www.chisosei.jp/>)

龍泉院ウェブサイトのコンテンツ制作は、非常に簡便に行なえるように工夫されています。ワードを使いこなしていच्छやる方なら、どなたでもコンテンツを制作することができますので。ご興味のある方は五十嵐嗣郎か斉藤正明さんにご連絡下さい。これまで戸塚英明さんが仲間に入ってくださいましたが、一人でも多くの運用の仲間を求めています。

『明珠』五〇号記念発行に寄せて

柏市 バートックス代表 竹澤 雅彦

この度は『明珠』の五〇号記念の発行、誠におめでとうございます。また、常日頃より弊社をご愛顧賜り厚く御礼申し上げます。

本年新たに開設された龍泉院様のウェブサイトへの制作にたずさわらせて頂いた業者とはいえ、この様な駄文を記念すべき五〇号に寄稿させて頂く事、至極恐縮に感じておりますが、一言祝辞を申し上げます。

最初に龍泉院様のウェブサイトへの制作のお話を頂いたのは、二〇〇七年の初秋の事であったと思いますが、関係者の皆様には、その後幾度ものお打合せにお付き合頂きました、多くのお手間とお時間をお取り頂きました事、あらためまして御礼申し上げます。

弊社では、これまで主に企業や団体のウェブサイトの制作を行って参りましたが、法人とはいえ、宗教法人のウェブサイトに関しては経験則が無かったため、当初は関係者の皆様に、随分とトンチンカンな質問をしました。が、参禅会の五十嵐様を始め多くの皆様、丁寧にご指導頂いたお陰で、何とか公開に漕ぎ着けたと感じております。

また、結果として龍泉院様の設備増強が必要になった際にも、ご老師様や奥様にも大変よくして頂き、一製作業者と致しましては、この上なく快適に仕事をさせて頂いたと感じており、重ねて感謝申し上げます次第であります。

これまで弊社では、「お客様が簡便にタイムリーな情報発信を行えるツール」としてのウェブサイトの制作を常々意識して展開して参りました。その点から申上げれば、龍泉院様や参禅会様は、発信される情報は数限りなく存在され、お打合せを進めさせて頂く過程で、「何としても社会に広く知られるべき」と考えるに至りました。

幸い弊社が取扱うウェブサイト制作は、インターネット上で行われる情報発信のため、話題の大小に関わらず、言語の問題を除けば、世界中に一斉発信の出来るものであります。また、今回のウェブサイト制作にあたっては「Joomla! (ジュームラ)」というシステムにご提案させて頂きました。

この「Joomla!」は、コンテンツ・マネージメント・システム(ウェブサイトの管理・運営を簡便に行う仕組み)の一種で、既に世界中の多くのウェブサイトで採用されており

ますが、日本国内ではまだこれから普及していくと見込まれるシステムで、ご提案させて頂いた当時は、国内ではまだマイナーなイメージは拭えない存在でした。しかし、実際に国連機関の一部でも既に採用され、「Joomla」を活用した広報活動を行っております。

採用の理由はいくつかありますが、以前から弊社がお客様にご提案させて頂く際に必ず申し上げている、「パソコンでインターネットが見れて、日本語が打てる方でしたら何方でも管理も運用もして頂けます。」の一言に凝縮されます。

何度かお打合せを重ね、基本システムも固まり、さらに椎名ご老師のお話をお聞きした時に、これこそインターネットを活用し、広く社会に伝えるべき有益な情報であると確信いたしました。特に椎名ご老師には、是非ともブログを開設していただき、ご老師の豊富な仏教に関する知識を公開していただきたいと、個人的には思いました。

今回のウェブサイト制作が終わって、何より製作者冥利に尽きますのは、皆様のご協力のもと公開されたウェブ 사이트が、多くの方々にご覧頂けた事と、ご覧頂いた方々からお問合せも増えてきているとお伺いした事であります。

ます。

現在、規模の大小に関わらず、多くの企業ではウェブサイトを開設されておりますが、その実態としては数年来更新がされていないサイトも多数存在し、本来その企業のイメージを向上させなければならないはずのウェブ 사이트が、むしろイメージダウンを推進するという、皮肉な結果をもたらしているケースも少なくないのです。

営利企業ですらそのような状況にある企業が多数存在する中、龍泉院様のウェブサイトでは、毎月のご老師様の口宣が、音声で何時でも拝聴する事が出来、尚且つ定例参禅会のみならず、様々な行事や過去の資料までもご紹介されておられ、閲覧者にとっては来るのが楽しみになるウェブサイトではないかと拝察致します。これもひとえに、皆様の日々のご努力と情熱がなされるものと、心中より敬意を表する次第であります。

手前どもでは、制作段階で同様の趣旨のウェブサイトを多数閲覧しておりますが、これはご提案のアイデアを探る作業として欠かす事が出来ないプロセスであります。ところが同様の趣旨で運用されているウェブサイトで、龍泉院様のような更新頻度で、詳細に亘

った情報発信をされておられるウェブサイトは、殆ど存在致しません。

これは裏を返せば、知りたいと思われた方にとつて、インターネットで調べても知る事が出来ない環境であるという事であり、人間の英知が限られた範囲でしか共有されないという寂しい現実でもあると考えます。

龍泉院様のウェブサイト閲覧者が増えていく、或いはお問合せが増えておられるという事は、即ちその情報を欲している方が多数存在される事の裏返しでもあります。

ご多忙な皆様には、更に鞭打つような事と十分承知致しておりますが、敢えて申し上げますと頂ければ、今後とも皆様の英知を、お一人でも多くの方々にお伝え頂くべく、タイムリーで新鮮な情報の発信を、続け頂きます事を敢えてお願い申し上げます、記念号発刊に寄せての祝辞とさせて頂きます。

多数の製作会社の中より、弊社にご用命賜りました事、あらためまして厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございます。これに懲りず、今後とも岡田印刷ともどもパートナーとしてご愛顧賜ります様、何卒宜しくお願い申し上げます。

花祭り

四月八日（火）、春の嵐の中、午後二時から、梅花講員一〇名と参禅会員七名参列のもと、釈尊降誕会の法要が、龍泉院で執り行われました。まず梅花講の皆様による「釈尊花祭御和讃」が朗々と唱えられ、法要が始まりました。

法要は椎名老師が導師をお勤めになり、維那以下の配役は参禅会員がつかしました。参禅会員の方はお役の経験が少ないので、事前に法要のリハーサルを行いました。本番でも少しあやしい動作が見られました。今後しっかり練習をつんでもらいたいと思います。

法要の後、全員で記念写真撮影をし、お釈迦様に甘茶をかけた後、梅花講の方の手作りによる草餅をいただきながら、甘茶を喫しました。

お茶を飲み一服した後、お釈迦様への報恩の坐禅を一炷行ってから解散となりました。

筍掘り

四月の月例参禅会の後、毎年恒例の筍掘りが龍泉院の裏山の竹林で行われました。参禅中降っていた雨も茶話会の頃には上がり、今

年もお天気に恵まれた筍掘りになりました。

年番幹事さんから筍掘りに関するご注意があった後、竹林に入り、鍬や筍掘り専用のスコップなどで筍を掘る人、掘り上げた筍を一輪車で運ぶ人、地面を靴底を擦りながら筍の頭を探す人に分かれて、三〇分ほど筍掘りが行われました。

掘りあげた筍は、各自に大小一〇本ほど均等に分けられ、杉浦さんの奥さまお手製の袋に入れ、さらに小山さんをご用意してくださった米ぬかを加えて自宅に持ち帰りました。

龍泉院さん、杉浦さん、小山さんのお陰で、今年も美味しい筍料理を頂くことができました。感謝！感謝！

施食会

今年で七五五回目を迎える龍泉院の施食会が、八月一日に行なわれました。

八時半に集合、杉浦さんの指揮のもと、早速、女性陣は茶菓やお弁当の準備に、男性陣は本堂の飾りつけの作業に入りました。

本堂の準備作業完了後、早めのお昼を済ませた後、駐車場の整理係と本堂の案内係の二班に分かれて、新盆ご供養に来られるお客さんたちの対応にあたりました。

一二時四五分から龍泉院梅花講の講員の方々による詠讃歌の奉詠が始まり、続いて、東京清岸院住職 川岸高眞老師のご法話がありました。

川岸老師からは、お釈迦様の教えの根本について次のようなお話がありました。

根本のお教えとは、「全ては縁によって起り、常に変化している。人に悩みや不満があるのは、身の回りのものが変化しないと執着するからである。煩惱を離れて、世の中を見られるようになれば、悩みはなくなるのである」と述べられました。

川岸高眞老師のご法話は大変分かりやすく、新盆を迎えられた親族の方々には、非常に有益なお話だったのではないかと思います。

暫く休憩の後、追善供養となり、椎名老師が導師となり入堂され、上香普同三拝、般若心経、大悲心陀羅尼、甘露門、焼香、新盆闍係者の焼香などが続き、午後三時半に散堂となりました。

後片付けが終わった後、観音堂でご老師から感謝のお言葉があり、龍泉院さまからはお弁当やお土産などをいただきました。しばらく懇談の後、役員・参禅会有志の懇親会もお開きになりました。

沼南雑誌

参禅会記録（一）内は座談の司会者

平成二〇年

三月二三日

（小畑 二郎氏）

四月八日

花祭り

幹事

小畑 節朗氏
杉浦上太郎氏
鈴木 民雄氏

●四月二七日

（根本 保氏）

坐禅・禅講後、筍掘り

●五月二五日

（刑部 一郎氏）

●六月七・八日

一夜接心

幹事

杉浦上太郎氏
鈴木 民雄氏

●六月二三日

（石田 七重氏）

●七月二七日

（中寫 宏誠氏）

●八月一六日

九名

「龍泉院施食会」作務奉仕

法話 東京清岸院ご住職

川岸高真老師

●八月二四日

（斉藤 正明氏）

龍泉院参禅会簡介

一、日時

毎月第四日曜九時より（初参加の方は八時半まで
に來山のこと）四月は八時半より坐禅作法指導

一、坐禅

第一炷 口宣、坐禅三〇分
経行 一〇分

第二炷 坐禅三〇分

一、講義

本版三通、開経偈を唱え、椎名宏雄老師より『正
法眼蔵』の提唱を聞く。現在「嗣書」の巻

一、座談

自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散

一、参加資格

年齢、性別を問わず、どなたでも参加できます

一、会費

無料

一、一夜接心

六月上旬（本年は六月七・八日）一泊し、七炷の
坐禅とご提唱を聞く

一、成道会坐禅

月例参禅会の他に、毎年一二月の第一あるいは
第二日曜（本年は一二月七日）釈尊成道を讃え坐
禅、成道会法要後、法話を聴取、点心を共にする

エブサイトにUPして、インターネ
ットからでも『明珠』の記事を検索・
閲覧できるようにするつもりです。

▼地球温暖化のためか、今年の夏の
雨の降り方は半端ではなかった。東
南アジアのスコールのように、ゲリ
ラ的に暴れまわり、各地に被害をも
たらした。しかし秋風が吹くようにな
り、猛暑もようやくおさまってき
たが、涼しくなると夏の疲れがどつ
と出るのではないかと心配である。（秀
嗣）

▼平成六〇年四月八日、私たちの会
報『明珠』が発刊されました。誌名
『明珠』の命名と題字の揮毫は、も
ちろん椎名老師です。清水さんも述
べていますが、「明珠」創刊号に、
命名の由来が左記のように示されて
おります。明珠とは真如・仏性・法
性・本来面目などのたとえであり、
これらはこの世界における真実のす
がたを示している。常に円満で無欠
無余、表も裏もなく、不二平等、内
外玲瓏、キラリと光っている当体そ
のものであって、これを明珠とたと
える。

▼今回、光栄にも、「目録」「索引」
の原稿作成を担当し、感慨ひとしお
でした。会員の心が投影されている
『明珠』は、まさに真実の「明珠」
であることを確信。（宏済）

坐禅を続けることが力となって、
さまざまな功德に繋がると感じずに
はいられません。（隆道）

▼五〇号記念号発行に際して、過去
の『明珠』の記事目録を杉浦さんが
作成してくださった。これにより、
過去の記事検索が容易になり、何よ
りも参禅会の貴重なデータとなりま
す。今後、このデータを龍泉院のウ

五十音	著者名	号 数
す	杉浦上太郎 (宏済)	6, 14, 20, 24~26, 28, 30, 33, 35, 37, 38, 42, 44, 46
	鈴木 民雄	46, 50
そ	宋 小 凡	41
	添田 昌弘	24, 28, 34, 35, 41, 43, 46, 47
	染谷 はる	8
た	高野千代子	17, 18, 20, 22~25, 27, 28, 30, 36, 40, 50
	高野 哲男	24
	高間 利介	1, 4~6, 11, 18, 20
	田口 真美	37
	竹澤 雅彦	50
	武田 博志	3, 5~7, 9, 17, 20, 23, 29, 30, 36, 38, 44, 46, 48
	武山喜代子	4
ち	張 江 南	28
つ	土田 明彦	30
て	程 正	41
	寺田 哲朗	2, 4, 10, 20, 21, 23~25, 28, 30, 35, 36, 41, 45, 46, 49
	寺田 廣葉	24
と	徳山 浩	4, 20, 36, 40
	戸塚 英明	37
	富澤 勇	46, 47
	富田 文子	1, 2, 4, 6, 8, 11
	登森 秀志	50
な	中川 俊二	6
	中寫 宏誠 (南洲男)	4, 17, 20, 24, 28, 30, 32, 33, 35, 40, 46, 47, 50
	永野 昭治	35, 39, 40, 41
に	二階堂雄一	33
ね	根岸 宣子	13
	根本 保	45, 46
は	萩原 清光	13
	服部 純雄	45, 46

五十音	著者名	号 数
	羽仁 素道	4
	浜根 勝彦	46
ひ	久光 守之	28, 30, 35, 48
	平沢 満代	4, 9
ふ	藤原 公	9, 15, 16, 19
ま	牧野 洋子	22, 30, 46
	政安 裕良	12, 14, 20, 23, 27
	松井 隆	24, 28~30, 34, 38 41, 46
み	三浦 輝行	33, 36
	美川 武弘	25, 28, 34, 41, 45 46, 48
	美川 恒子	28, 46
	皆川 廣義	12 (別冊)
	三町 勲	2, 4, 8, 10, 11, 15, 19, 20, 25, 26, 28, 30, 40, 41
	宮田 哲男	8, 9, 20, 30
	宮原 惇	16, 20
	宮本 茂	19, 20, 24, 28, 35, 46
む	室橋 旭	24
も	盛 敏夫	20
	森岡 糸子	36
	森岡 俊雄	1~6, 8, 10, 12, 13, 20, 22, 30
や	八重樫里永	37
	八木下真司	7, 20, 30
	安本小太郎	7, 15, 18~20, 22, 24, 25, 28~31, 33, 34, 40~42
	山本 哲弘	41, 43
よ	余語 翠巖	8
	吉田 禎輔	43

「明珠」索引〔1～50号〕

〔 自／第1号（昭和60年4月8日発行）
至／第50号（平成20年10月5日発行） 〕

五十音	著者名	号 数
あ	逢坂 國一	46
	相澤 善彦	36, 46, 47
	青木 志郎	17, 20, 21
	浅野 眸	14
	東 隆眞	46
	阿部 史子	32
	新井ミチ子	7
	荒木 二郎	48
	有村 明子	2
い	五十嵐嗣郎	2, 6, 12, 15, 16, 18, 20, 21, 23, 24, 27, 28, 30, 33, 34, 38, 40~43, 46, 50
	石川 光学	35
	石田 七重	26, 27, 30, 35, 37, 40, 41, 43, 44, 46, 47, 49
	伊藤 幸道	38, 50
	井之輪 進	8, 20, 24, 28
	今泉 章利	12, 16, 22, 30, 41
	今泉 房子	18, 21, 25
う	植村 光伸	26, 30
お	近江 堅一	31
	大坂 晶子	35, 41
	大坂 昌宏	22, 25, 30, 35, 41, 43, 48
	小川知枝子	42
	小畑 二郎	42, 46, 47, 49
	小畑 節朗	13, 15, 17, 19~25, 27, 28, 30, 35~41, 46, 50
	恩田美智子	39
か	貝森 武夫	39

五十音	著者名	号 数
	加藤 孝	26, 27, 30, 35, 37, 38, 46, 47
	加藤 健之	5, 6, 8, 9, 11, 12, 14
	加藤 広之	7
	金崎 史	4
	神戸 正	2, 10
	神戸 はぎ	25
き	北岡やす江	8, 10, 20, 30
	木村 勇	20
く	栗田 章	6, 20, 26
	軍地恒四郎	48
け	刑部 一郎	48
こ	小山 齐	46, 47, 49
さ	齋藤 純一	39
	斉藤 弘	25
	佐々木宏幹	50
	佐々木秀子	20
	佐藤 初恵	11, 14, 18, 26
	佐藤 征志	7, 11
	里深 徳一	30, 31
	佐野 明子	22
	沢村 国勝	3, 4, 20
し	椎名 宏智	21
	椎名 宏雄	1~50
	四宮 清二	3, 7
	清水 忠	41
	清水 秀男	9, 20, 22, 28, 30, 39, 40, 42~50
	下村 忠男	4, 10
	神宮寺将雄	28

No.	タイトル	著者名	頁
2	只管感謝の二〇年	杉浦上太郎	6~7
3	二〇年たって、ひとつ	武田 博志	7~8
4	平成丙戌年頭の参禅	石田 七重	8~9
5	いたずらに生きず ひたすらに生きる	清水 秀男	9~11
45号 平成18年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(三九) 第五〇則 雪峰甚麼	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	初めての「一夜接心」	根本 保	3~4
3	一夜接心に 参加させて戴いて	服部 純雄	4
4	一夜接心	鈴木 民雄	4
5	一見似ている譬え話	寺田 哲朗	4~5
6	崇高で優雅な永遠り 恋人弥勒菩薩を訪ねて	清水 秀男	5~6
7	スイス三大名峰を巡る ハイキングの旅(上)	美川 武弘	7
46号 参禅会発足35周年記念号 平成19年1月26日発行			
1	三五年の精進を祝して	龍泉院住職 椎名 宏雄	表2
2	東隆眞老師の 禅風に見える *編集:添田昌弘氏記録	大乘寺山主 東隆眞・龍泉 院椎名宏雄	1~2
3	記録ノ大乘寺、 道元禅師祖蹟巡礼の旅	武田 博志	13~17
4	東老師のお話から	寺田 哲朗	18
5	大乘寺から萬福寺まで	石田 七重	18~19
6	ご縁をいただいて	小畑 節朗	19
7	安楽の法門	中嶋 宏誠	19
8	坐禅を始めた頃の思い出	五十嵐嗣郎	19~20
9	私の初心の坐禅	杉浦上太郎	20~21
10	初心	武田 博志	21
11	初心の坐禅	添田 昌弘	21~22
12	「一発菩提心を 百千万発するなり」	清水 秀男	22
13	初心の坐禅	宮本 茂	22
14	月日は流れ	牧野 洋子	22~23
15	初めての 「一夜接心」の思い出	美川 恒子	23
16	会社人間からの脱皮	松井 隆	24
17	初めての参禅	石田 七重	24
18	私にとっての禅	加藤 孝	24~25
19	私の初日	相澤 善彦	25
20	参禅会入門の思い出	富澤 勇	25
21	坐禅について	小山 斉	25~26
22	石の上にも三年	小畑 二郎	26
23	一生感動	逢坂 國一	26~27
24	初坐禅の時	浜根 勝彦	27
25	初めての坐禅	服部 純雄	27~28
26	初心	根本 保	28
27	「初心」	鈴木 民雄	28
28	スイス三大名峰を巡る ハイキングの旅(下)	美川 武弘	28~29
47号 平成19年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(四〇) 第五六則 密師白兎	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	上山二〇年	添田 昌弘	7~8
3	年番幹事を終えて	富澤 勇	8~9
4	年番幹事によせて	小畑 二郎	9
5	年番幹事を務めるに当たって	小山 斉	9~10

No.	タイトル	著者名	頁
6	『口宣』<九号>	中嶋 宏誠	10
7	『口宣』との出会い	石田 七重	10~11
8	受身は立ち上がる原動	清水 秀男	11~12
9	曹洞宗「歳末助け合い」 に参加して	加藤 孝	12~13
10	ハーフマラソン	相澤 善彦	13~14
48号 平成19年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(四一) 第三六則 馬師不安	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	初めての一夜接心	荒木 二郎	3
3	初めての一夜接心	軍地恒四郎	4
4	一夜接心への初参加	刑部 一郎	4
5	待つことの深さを知って 花は咲く草木も人も人間も	清水 秀男	6~7
6	病は病に任し候 (我が闘病の記)	久光 守之	7~8
7	心臓ペースメーカーに 生かされて	美川 武弘	8~9
8	災難	武田 博志	9~11
9	出会い	大坂 昌弘	11
49号 平成20年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(四二) 第八六則 臨濟大悟	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	「永平寺宮崎貴主が 我々に残された メッセージ」	清水 秀男	4~5
3	『口宣』一達磨図と私	石田 七重	5~6
4	小さな発見	寺田 哲朗	6~7
5	年番幹事を終えて	小山 斉	7
6	年番幹事を終えて	小畑 二郎	7~8
50号 創刊50号記念 平成20年10月5日発行			
1	『明珠』五〇号を祝して	龍泉院住職 椎名 宏雄	1
2	坐禅の力 一龍泉院参禅会会報『明珠』 第五〇号発行に寄せて一	駒沢大学 名誉教授 佐々木宏幹	2~4
3	従容録に学ぶ(四三) 第一則 世尊陞座	龍泉院住職 椎名 宏雄	5~7
4	「明珠」五〇号発行に想うこと	高野千代子	7
5	「明珠の教えに学ぶ」	清水 秀男	8~9
6	初めての「一夜接心」	登森 秀志	10~11
7	身体が無くなる坐	中嶋 宏誠	11~12
8	首座法戦式に随喜して	小畑 節朗	12~13
9	心の時代を生き抜く 僧侶を目指して	伊藤 幸道	13~14
10	切に思うことは 必ずとぐるなり	龍泉院住職 椎名 宏雄	14~15
11	第八一回大道会弁道法 摂心会に参加して	鈴木 民雄	15~16
12	龍泉院ウエブサイト 公開される	五十嵐嗣郎	16~17
13	『明珠』五〇号 記念号発行に寄せて	竹澤 雅彦	17~18

No.	タイトル	著者名	頁
14	身に余る得度式	大坂 晶子	21
15	米国のテロと得度式	中畠 宏誠	21
16	法名「無根宝樹大師」賜る	石田 七重	21~22
17	勝縁を得て	永野 昭治	22
36号 平成14年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(三一) 第九一則 南泉牡丹	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	盛岡翁、 変わらぬ雷喝を!	龍泉院住職 椎名 宏雄	4
3	盛岡語録	小畑 節朗	4~5
4	盛岡大先輩に合掌	寺田 哲朗	5
5	『南海太郎正尊』	徳山 浩	5
6	刀工盛岡先輩を偲んで	高野千代子	5~6
7	切に生きた人	武田 博志	6
8	家族の絆	盛岡 糸子	6~7
9	夕暮れの帰り道	三浦 輝行	7
10	雨の日の新年会	相澤 善彦	7~8
37号 平成14年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(三二) 第九則 南泉斬猫	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	一泊参禅会に参加して	戸塚 英明	3
3	二祖慧可大師の耳 (終章)一雪舟筆「慧可 断臂図」雑感一	小畑 節朗	4~5
4	「大慈宏濟」を自指して	杉浦上太郎	5
5	『明珠』三六号を読んで	石田 七重	6
6	初坐禅体験記	八重樫里永	6
7	初坐禅体験記	田口 真美	6
8	初坐禅体験記	丸山 香織	6~7
9	施食会の功德	加藤 孝	7
38号 平成15年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(三三) 第五三則 黄檗禪糟	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	「我を成す者は朋友」	堂 頭 椎名 宏雄	3
3	仏道の相続	小畑 節朗	4
4	伊藤幸道さんの 幸せな道	杉浦 宏濟	4~5
5	信じる道、ひたすらに	武田 博志	5
6	真っ白な心で	伊藤 幸道	5~6
7	会社人から社会人へ	五十嵐嗣郎	6
8	心の置き所、拠り所	松井 隆	7
9	重い決断	加藤 孝	7~8
39号 平成15年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(三四) 第四七則 趙州柏樹	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	「一夜接心」に参加して	貝森 武夫	3~4
3	自己治療力	清水 秀男	4~5
4	老梅山吉峰寺	小畑 節朗	5
5	ご縁に感謝する(上)	永野 昭治	5~6
6	良寛さまも登ったろう 四国遍路巡拝の記	久光 守之	6~7
7	初めての坐禅	恩田美智子	7
8	坐禅を始めて	齋藤 純一	7
40号 創刊20周年記念号 平成16年4月8日発行			
1	<対談> 「従容録」に学ぶ *編集:武田博志氏記録	龍泉院住職 椎名 宏雄 小畑 節朗	2~6
2	「是れ何ぞ」	徳山 浩	8

No.	タイトル	著者名	頁
3	坐って二〇年	三町 勲	8~9
4	今、20年を想って	高野千代子	9
5	上山二〇年「是什麼」と 『正法眼蔵』提唱	中畠 宏誠	9~10
6	ご縁に感謝する(下)	永野 昭治	10~12
7	梵時魚寺を訪ねて	安本小太郎	12~13
8	起き上がり小法師に学ぶ	清水 秀男	13~14
9	今年の夢	五十嵐嗣郎	15
10	加藤和子さんを悼む	石田 七重	15
41号 中国仏蹟参拝の旅 平成16年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(三五) 第六則 馬祖白黒	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	禅の源流	団 長 椎名 宏雄	3
3	江西雲游	小畑 節朗	4
4	百丈山へ	寺田 哲朗	6
5	洞山普利寺を訪ねて	添田 昌弘	6~7
6	雲峰廬山を往く	三町 勲	7~8
7	四祖寺、五祖寺参拝	永野 昭治	8~9
8	涙	大坂 昌宏	9
9	感動の旅	大坂 晶子	9
10	もう一つの禅の発見	宋 小 凡	11
11	曹山寺訪問記	今泉 章利	12
12	清原山静居寺	安本小太郎	12~13
13	「百丈清規」と「作務」に ついての雑感	美川 武弘	13~14
14	龍泉院中国仏蹟 参拝団に参加して	程 正	14~15
15	仏教遺蹟参拝訪中	石田 七重	15~16
16	永く長い洞山・ 曹山への道	五十嵐嗣郎	16~17
17	再び仏教伝来の旅に 参加して	松井 隆	17
18	慧能の経路	清水 忠	17~18
19	中国古寺参拝旅行に 参加して	山本 哲弘	18~19
20	一夜接心	石田 七重	19
42号 平成17年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(三六) 第一五則 仰山挿鉄	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	初めての成道会の感動	小畑 二郎	4~5
3	成道会に参加して	小川知枝子	4~5
4	参禅二〇年	安本小太郎	5
5	もう「上山二〇年」	五十嵐嗣郎	5~6
6	初めての半日托鉢修行記	杉浦上太郎	6
7	ブッダ最後の教え	清水 秀男	7
43号 平成17年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(三七) 第八四則 俱胝一指	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	「一夜接心」に参加して	山本 哲弘	3~4
3	私の一夜接心	添田 昌弘	4
4	初心者参禅	吉田 禎輔	5
5	祖庭の山河	石田 七重	5
6	心呼吸のすすめ	五十嵐嗣郎	6
7	「般若心経」の 二つの側面について	清水 秀男	6~8
8	深謝(中国の旅)	大坂 昌宏	9
44号 平成18年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(三八) 第三五則 洛浦伏膺	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2

No.	タイトル	著者名	頁
7	在家の遺偈	小畑 節朗	7
28号 第二次訪中特集 平成10年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(二五) 第二三則 魯祖面壁	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	第二次訪中の円成を祝す	訪中団団長 椎名 宏雄	3
3	感動の<第二次>訪中記	杉浦上太郎	3~4
4	仏教伝来を辿る(二)	松井 隆	4~5
5	二つの大きな思い出	中寫 宏誠	5
6	百聞は一見に如かず	寺田 哲朗	5~6
7	少林寺堂拝観及び 達磨面壁洞に立って	宮本 茂	6~7
8	達磨歓迎	五十嵐嗣郎	7
9	中国仏蹟参拝で撮る	三町 勲	8~9
10	仏教を親しむ旅に感謝 我、鄭州にて甘い	張 江 南	別紙1
11	香烏龍茶に遭遇す	神宮寺将雄	別紙2
12	中国旅行にみる煩惱	安本小太郎	10
13	訪中雑感	添田 昌弘	10
14	「中国仏蹟を訪ねる旅」 見聞記	美川 武弘	10~11
15	仏縁の旅をいただいて	高野千代子	11~12
16	客亭の提唱	小畑 節朗	12
17	二度目の訪中の思い出	井之輪 進	12
18	四国八十八ヶ所徒歩巡拝	久光 守之	13
19	遠い昔の一泊参禅の思い出	美川 恒子	14~15
20	人間は移動出来る樹木	清水 秀男	15
29号 平成11年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(二六) 第六五則 首山新婦	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	「成道会」典座に挑戦して	松井 隆	4~5
3	四国歩き遍路	安本小太郎	5~6
4	「どうだった?」-沢村国勝 さんの追悼にかえて-	武田 博志	7
30号 発行十五周年記念号 平成11年10月5日発行			
1	『明珠』十五周年にあたり	龍泉院住職 椎名 宏雄	2
2	「従容録に学ぶ」 味読のお勧め	小畑 節朗	3
3	想いのままに	高野千代子	6
4	急所	森岡 俊雄	6
5	良寛詩集を載いて	寺田 哲朗	6~7
6	大雄寺の羅漢像	三町 勲	7
7	禅語と安全訓話	中寫 宏誠	7
8	坐禅のある生活	安本小太郎	7~8
9	禅との出会い	八木下真司	8
10	明珠がいつぱい	五十嵐嗣郎	8
11	原点を懐かしむ旅	杉浦上太郎	9
12	初心忘るべからず	宮田 哲男	9
13	忘れても	北岡やす江	9~10
14	只管打坐	清水 秀男	10
15	我が生き方と坐禅	今泉 章利	11
16	「星」	大坂 昌宏	11
17	禅は心の原点	里深 徳一	11
18	参禅の思い	松井 隆	11~12
19	私の宗教は仏教です	石田 七重	12
20	辿り着いて、禅	加藤 孝	12~13

No.	タイトル	著者名	頁
21	健康ブームの行きつく先	植村 光伸	13
22	これから	久光 守之	13~14
23	坐禅	土田 明彦	14
24	道草くいなから	牧野 洋子	14~15
25	時は過ぎ	武田 博志	15
31号 平成12年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(二七) 第五七則 嚴陽一物	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	観音の宿	安本小太郎	5
3	父よ!	里深 徳一	6
4	参禅会に参加して 一やさしくなろうと している私一	近江 堅一	7
32号 平成12年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(二八) 第五五則 雪峰飯頭	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	坐禅と仏縁 一一泊参禅会雑感一	阿部 史子	4
3	修証義と母	中寫 宏誠	5
33号 平成13年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(二九) 第三七則 湊 山業識	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	初めての成道会	二階堂雄一	4
3	特別企画・ 安本氏へのインタビュー 歩き遍路、 観音巡りと続けて	安本小太郎 編集:今泉 房子氏記録	5~8
4	病中記	三浦 輝行	9
5	恒例「歳末助け合い」で 募金活動をされる椎名老師	杉浦上太郎	9
6	不思議な体験	中寫 宏誠	10
7	同事	五十嵐嗣郎	10
34号 平成13年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(三〇) 第七九則 長沙進歩	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	仏教東漸の旅	添田 昌弘	3~4
3	高昌故城	安本小太郎	4~5
4	沙中に仏と出会う	五十嵐嗣郎	5~6
5	仏教伝来を辿る(三)	松井 隆	6~7
6	「仏教東漸の旅」印象記	美川 武弘	7~8
35号 参禅会発足三十周年記念 平成13年12月8日発行			
1	三十年の精進を祝して	龍泉院住職 椎名 宏雄	1
2	動静大衆に一如す	小畑 節朗	2
3	感動裡に円成す!	杉浦上太郎	3~10
4	雨音を聞いて 坐った宝慶寺	寺田 哲朗	10
5	宝慶寺と總持寺祖院	中寫 宏誠	10
6	宝慶寺での参禅	添田 昌弘	10~11
7	「北陸路、仏道修行」	宮本 茂	11~12
8	ひと夜限りの雲水	石田 七重	12
9	さわやかな旅	加藤 孝	12~13
10	慈雨に煙る 宝慶寺での参禅	久光 守之	13
11	第二回得度式 一堂頭祝辞一 *編集:武田博志氏記録	龍泉院住職 椎名 宏雄	14
12	第二回得度式一説戒一 *編集:武田博志氏記録	廣徳寺住職 石川 光学	15~19
13	あの一言	大坂 昌宏	20~21

No.	タイトル	著者名	頁
13	参禅会長期欠席会員のたわごと	八木下真司	10
14	テニス雑感	五十嵐嗣郎	10
15	お寺の門は広い	武田 博志	10
16	富士山頂に感謝	栗田 章	11
17	死の用意	宮田 哲男	11
18	明珠十周年記念号 発刊をお祝いして	北岡やす江	11
19	野辺の小草	清水 秀男	11
20	形見の「明珠」	宮原 惇	12
21	初めての坐禅の思い出	井之輪 進	12
22	フィリピン・ルソン島に 出張して	盛 敏夫	12
23	薬師如来の真言	政安 裕良	12~14
24	心やすらかな参禅会	佐々木秀子	15
25	こだわらず自分に生きる道	宮本 茂	15
26	継続は素晴らしい	青木 志郎	15
27	楽禅	木村 勇	15
21号 阪神・淡路大震災特集 平成7年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(一九) 第三三則 三聖金鱗	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	二祖慧可大師の耳 (その二)一雪舟筆「慧可 断臂図」雑感一	小畑 節朗	3
3	龍泉院の「時」	寺田 哲朗	3~4
4	震災地の復興を願って	龍泉院住職 椎名 宏雄	4
5	出勤雑感	五十嵐嗣郎	4~2
6	震災地の町から	今泉 房子	5~6
7	心のスズポーツ	青木 志郎	6
8	ボランティアの体験から	椎名 宏智	6~7
22号 平成7年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(二〇) 第四二則 南陽浄瓶	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	二祖慧可大師の耳 (その三)一雪舟筆「慧可 断臂図」雑感一	小畑 節朗	3
3	一泊参禅会に参加して	佐野 明子	5
4	一泊参禅の印象	安本小太郎	5
5	夢の国での一泊参禅	高野千代子	6
6	一泊参禅会に参加して	牧野 洋子	6~7
7	澄心静慮	清水 秀男	7
8	可睡斎一泊参禅会に 参加して	今泉 章利	7~8
9	真摯な旅	大坂 昌宏	8
10	可睡斎一泊参禅報告	森岡 俊雄	8
23号 平成8年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(二一) 第九八則 洞山常切	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	遍路にご縁をいただいて	高野千代子	3
3	死線をさまよって(天)	政安 裕良	3~4
4	一知足能忍の人一 神戸正翁を偲ぶ	小畑 節朗	4
5	お寺と山と三歳の私	武田 博志	5~6
6	鏡を持った猿公	寺田 哲朗	7
7	《龍泉院参禅会二五周年 記念行事》中国五山を 巡る旅出発に際して	五十嵐嗣郎	7
24号 発足二十五周年記念号 平成8年10月5日発行			
1	五山巡拝を円成して	龍泉院住職 椎名 宏雄	2

No.	タイトル	著者名	頁
2	「自己をならふ」をかみしめて	幹 事 小畑 節朗	3
3	夢叶う「中国五山巡礼の旅」	編集 杉浦上太郎	5
4	中国五山の旅を終えて	五十嵐嗣郎	6~7
5	五山巡りと 西湖の辺の太極拳	井之輪 進	7
6	参禅会二五周年に当って	添田 昌弘	8
7	遙かに憶う宝鏡微月の夜	小畑 節朗	8~9
8	古天童での想い	高野千代子	12
9	緊張(天童寺・万寿寺) そしてラブコール	高野 哲男	12~13
10	径山と天童寺	寺田 哲朗	13~14
11	車窓に見た もう一つの風景	寺田 廣葉	14~15
12	「中国五山の旅」と もう一つの訪中の目的	中島 宏誠	15~16
13	仏教伝来を辿る	松井 隆	16~17
14	「中国五山の旅」を終えて	宮本 茂	17
15	径山万寿寺	室橋 旭	17~18
16	天童山の静けさ	安本小太郎	18~19
25号 「禅を聞く会」特集 平成9年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(二二) 第一二則 地藏種田	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	講師さま接遇準備より	美川 武弘	3~5
3	記念講演会の舞台の袖にて	今泉 房子	5
4	「禅を聞く会」印象記	杉浦上太郎	5~6
5	「禅を聞く会」の思い出	安本小太郎	6~7
6	夏は暑い	高野千代子	7~8
7	留置場からの参禅者	大坂 昌宏	8~9
8	折にふれて	神戸 はぎ	10
9	小心和ごむ禅講話	斉藤 弘	10
10	高間大先輩を偲ぶ	三町 勲	11
11	ご縁を偲んで	高野千代子	11
12	富田文子さんを偲ぶ	小畑 節朗	12
13	経てみればつい先日の二〇年	寺田 哲朗	12~13
26号 平成9年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(二三) 第八三則 道吾看病	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	一泊参禅会に参加して	栗田 章	3
3	一泊参禅会は反省の場	三町 勲	4
4	大雄山最乗寺での一泊二日	石田 七重	5~6
5	「食べること」も立派な修行	植村 光伸	7
6	感応道交の大施食会	杉浦上太郎	8
7	老いの一	佐藤 初恵	9
8	随想二題	加藤 孝	9~10
27号 平成10年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(二四) 第六八則 夾山揮剣	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	歳末助け合い運動と私	石田 七重	3~4
3	観音様と私	高野千代子	4
4	澤木興道『禅談』に学ぶ	五十嵐嗣郎	5
5	功德多大な年番幹事	加藤 孝	5~6
6	ご挨拶	政安 裕良	7

No.	タイトル	著者名	頁
9号 平成元年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(八) 第二〇則 地藏親切	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	いま、家族に感謝しつつ	平沢 満代	4
3	素直	清水 秀男	4
4	第二の人生を迎えて	宮田 哲男	5~7
5	木の周辺	武田 博志	6
6	摂心会に参加して	加藤 健之	7
7	「マイペンライ」 —東北タイに暮らして—	藤原 公	8~9
10号 平成元年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(九) 第三〇則 大隋劫火	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	龍泉院の「騎牛帰家」の図	寺田 哲朗	3
3	自然と一期一会	三町 勲	5
4	いま幸せを噛みしめながら	北岡やす江	5~6
5	愚感	森岡 俊雄	6
6	三尊仏を戴いて変わったこと	下村 忠男	6
7	知足常楽 〜わが人生を顧みて思うこと〜	神戸 正	7
11号「病と禪」特集 平成2年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(一〇) 第九四則 洞山不安	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	従病録 —お礼に代えて—	高間 利介	4~5
3	痛み何れより来たる	加藤 健之	5
4	小学校の日曜学校	富田 文子	6
5	おふくろさん	三町 勲	7
6	わが心	佐藤 初恵	8
7	石の上にも三年	佐藤 征志	8
12号 平成2年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(一一) 第八二則 雲門声色	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	随録	今泉 章利	4~5
3	参禅愚感	森岡 俊雄	5
4	单身赴任生活素描	五十嵐嗣郎	6
5	無神論者の坐禅	政安 裕良	7~8
6	初夏の聞法	加藤 健之	8~9
12号付録 平成2年12月8日発行			
教主釈尊 —その悲・智・慈の教え— *編集:高野千代子氏記録		皆川 廣義	1~14
13号 聖僧開眼特集 平成3年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(一二) 第一〇則 台山婆子	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	仏像を造る心	萩原 清光	3
3	造佛の思い	小畑 節朗	6
4	無題	森岡 俊雄	6
5	お化け話しにさそわれて	根岸 宣子	7
14号 平成3年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(一三) 第四九則 洞山供真	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	私の体験した事	佐藤 初恵	4
3	“医は仁術”を超越した 医師にひたすら合掌	杉浦上太郎	5~6
4	莫蹉過	加藤 健之	6
5	一日写経を体験して	浅野 眸	7
6	達磨はなぜ東へ行ったのか 「祖師西来意」私見	政安 裕良	8~9

No.	タイトル	著者名	頁
15号 平成4年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(一四) 第三九則 趙州洗鉢	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	母上への手紙	三町 勲	4
3	ある日の坐禅	安本小太郎	5
4	小さな転機	五十嵐嗣郎	5~6
5	小さなお袈裟をいただいて	小畑 節朗	6
6	手紙(インドから)	藤原 公	7
16号 平成4年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(一五) 第五四則 雲巖大悲	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	天童寺を訪ねて	五十嵐嗣郎	3
3	清水利一さんを偲ぶ	宮原 惇	5~6
4	龍泉院「おせがき」 大法要の一日寺男	今泉 章利	6~7
5	インド便り	藤原 公	7~8
17号 平成5年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(一六) 第二四則 雪峰看蛇	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	絵の中の禅	青木 志郎	3
3	お寺にきて	武田 博志	3~4
4	龍泉院に伺って	中野 宏誠	4
5	「明珠」の足跡をたどって	高野千代子	6
6	報土莊嚴	小畑 節朗	7
18号 平成5年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(一七) 第三八則 臨濟真人	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	恩寵	高間 利介	3
3	「みんな見ている」	高野千代子	3~4
4	一泊参禅会と私	佐藤 初恵	6
5	自業自得	安本小太郎	7
6	「おせがき」の裏方雑感	五十嵐嗣郎	7~8
7	香道と坐禅	今泉 房子	9
19号 平成6年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(一八) 第五則 清源米価	龍泉院住職 椎名 宏雄	1~2
2	二祖慧可大師の耳 (その一)一雪舟筆「慧可 断臂図」雑感一	小畑 節朗	3
3	心に残る言葉	宮本 茂	4
4	課題のない先に何が見える	三町 勲	6
5	彼岸入りを前にして	安本小太郎	6~7
6	インド隣村の小学校を訪ねて	藤原 公	7
20号 発刊一〇周年記念号 平成6年10月5日発行			
1	「明珠」十周年に当って	龍泉院住職 椎名 宏雄	2
2	参禅会・明珠に感謝	高間 利介	3
3	明珠と共に	小畑 節朗	3
4	会員の心で綴る… 「明珠」六話	杉浦上太郎	6~7
5	参禅会員の資格無し	森岡 俊雄	8
6	鎌田先生の業根譚	寺田 哲朗	8
7	気持ち新たに	徳山 浩	8
8	回想	三町 勲	8
9	一〇年を振り返って	高野千代子	9
10	落ちつき安定安心	中野南洲男	9
11	再び参禅	沢村 国勝	9
12	何にも成らん坐禅	安本小太郎	9

「目録」で見る『明珠』50号の歩み

～会員の心で綴った『明珠』～

No.	タイトル	著者名	頁
創刊号 昭和60年4月8日発行			
1	巻頭言	龍泉院住職 椎名 宏雄	1
2	龍泉院参禅会の足跡	龍泉院住職 椎名 宏雄	2～3
3	衆縁をいただいて —龍泉院参禅のこと—	高間 利介	5
4	参禅を続けて	富田 文子	8
5	作刀と坐禅(一) 「型」—本質を行くもの—	森岡 俊雄	9
2号 昭和60年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(一) 第二則 達磨廓然	龍泉院住職 椎名 宏雄	1～2
2	中国仏教寺院の現況	椎名 宏雄	3
3	龍泉院の地獄絵図	寺田 哲朗	4
4	平和の陰に…	有村 明子	5
5	筍掘り雑記	五十嵐嗣郎	6
6	筍掘りに寄せて	富田 文子	6～7
7	転機と坐禅	三町 勲	7
8	ささやかな私の信心	神戸 正	8
9	作刀と坐禅(二) 釈迦如来・達磨大師・ 御師家様に詫げる	森岡 俊雄	9
3号 昭和61年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(二) 第八則 百丈野狐	龍泉院住職 椎名 宏雄	1～2
2	坐禅との出会い	四宮 清二	4～5
3	初接心・思うまま	武田 博志	5
4	只管打坐への道	沢村 国勝	6
5	作刀と坐禅(三) —不立文字—	森岡 俊雄	6～7
4号 昭和61年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(三) 第七則 薬山陸座	龍泉院住職 椎名 宏雄	1～2
2	「願い」に生きる *編集:高野千代子氏記録	迦葉山龍華 院弥勒寺山 主羽仁素道	4～5
3	新天地をいただいて	高間 利介	5
4	参禅の旅	富田 文子	5～6
5	暁天坐禅の緊張	寺田 哲朗	6
6	原点を見つめて	徳山 浩	6
7	赤心	三町 勲	7
8	いびきの三重奏	中嶋南洲男	7
9	教育は呼吸なり	金崎 史	7
10	心豊に	平沢 満代	7
11	雙林寺	下村 忠男	8
12	本物に生きる	武山喜代子	8
13	お世話係として	沢村 国勝	8
14	作刀と坐禅(四) —『刀剣五行論』 作刀の原理—	森岡 俊雄	8～10

No.	タイトル	著者名	頁
5号 昭和62年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(四) 第二一則 雲巖掃地	龍泉院住職 椎名 宏雄	1～2
2	成道会のご挨拶	高間 利介	4
3	坐りははじめのこと	加藤 健之	4
4	インド旅行記(一) —ベナレスの仮眠堂で—	武田 博志	5～6
5	作刀と坐禅(五) —刀鍛冶の心術—	森岡 俊雄	6～7
6号 昭和62年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(五) 第五二則 曹山法身	龍泉院住職 椎名 宏雄	1～2
2	佛法僧を聞いて	高間 利介	4
3	一泊参禅会に参加して	栗田 章	4
4	小さな一日の修行	五十嵐嗣郎	4
5	お粥	加藤 健之	4～5
6	坐禅堂で坐って	森岡 俊雄	5
7	郷里を思う	富田 文子	5
8	インド旅行記(二) —ルンビニーのミニバス—	武田 博志	5～6
9	成道会を平素の励みとして	杉浦上太郎	7
10	いま、山水経に想う	高野千代子	8
11	心と体の相関	中川 俊二	9
7号「坐禅と私」特集 昭和63年4月8日発行			
1	従容録に学ぶ(六) 第一八則 趙州狗子	龍泉院住職 椎名 宏雄	1～2
2	坐禅と私	佐藤 征志	4
3	坐禅と私	四宮 清二	4～5
4	私の仕事と坐禅	八木下真司	5
5	初心忘るべからず	加藤 広之	6
6	坐禅と私	安本小太郎	6～7
7	模象と真竜	新井ミチ子	7
8	インド旅行記(三) —ブッダガヤの空の下—	武田 博志	8～9
8号 大雄山一泊参禅特集 昭和63年10月5日発行			
1	従容録に学ぶ(七) 第八五則 国師塔様	龍泉院住職 椎名 宏雄	1～2
2	厳かな御供式	染谷 はる	4
3	一泊参禅偶感	森岡 俊雄	4
4	天狗様のお寺に詣って	井之輪 進	4～5
5	大雄山最乗寺に詣でて詩う	三町 勲	5
6	初めての体験	宮田 哲男	5～6
7	現成公案の旅	富田 文子	6
8	幹事の誇り	加藤 健之	6
9	ご縁をいただいて	北岡やす江	6
10	「天地法界の風光」 *編集:小畑節朗氏記録	大雄山 最乗寺山首 余語翠巖	7～12

龍泉院

参禅会会報

創刊五〇号記念



●●
印 発

行／天徳山龍泉院
刷／岡田印刷株式会社

千葉県 柏市 泉
柏市高田 1116 | 4581

☎ 04 (7191) 1609
04 (7143) 3131